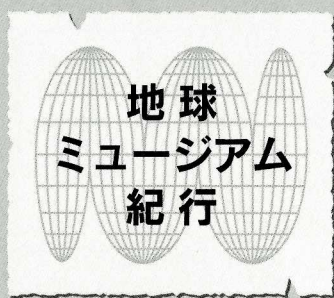


## ヨルダンで 博物館をつくる

森田 恒之 (もりた つねゆき)

本館名誉教授



国立ヨルダン博物館、  
カラク考古博物館、死海博物館、  
サルト歴史資料館／ヨルダン

学をおもにした研修にあてた。彼らの知見は確実に博物館の認識を変えた。まず学校と提携して自分たちの歴史や自然を知ることの大切さを知らせるイベントを開館前から始めたのだ。その面白さに気付いた若者たちのなかから学芸員志望者があらわれ始めている。

建物の基本設計は政府借款の準備段階で日本側が完成し、展示品や構成が未定のままに展示図面もできていた。異例ではあるが必要経費の算出にはそれも仕方がない。

展示工事が始まると職人が図面どおり大理石の台座を作り、ガラス箱をかぶせて展示ケースを作る。モダ

二〇〇五年一月から三年をヨルダンで過ごした。仕事は国際協力機構(JICA)の技術協力プロジェクト「博物館活動を通じた観光振興」付き専門家兼チーフアドバイザーだ。

ヨルダン政府は外貨獲得のひとつの手段として、二〇〇〇年から日本政府からの円借款で首都アンマン、死海周辺ほか二地域で七つの観光施設整備を進めており、なかに四つの博物館(国立ヨルダン博物館、カラク考古博物館、死海博物館、サルト歴史資料館)が含まれている。既存の施設を全面改装するカラクを除いて、すべて新設である。建築や改修にかかる工事は、借款の窓口である国際協力銀行(JBIC)と業務委託を受けた日本のコンサルタント会社、現地の建設会社の三者が協力して進んでいる(JBICの海外経済協力事業は二〇〇八年一〇月からJICAと統合した)。

当初計画では、これら四つの博物館はすべて昨年中に完成しているはずだったが、諸事情が重なって国立ヨルダン博物館とサルト歴史資料館は工事が遅れ、今年中の開館は困難そうだ、というのが最近漏れ聞く事情だ。

施設作りから始まった事業を運営面でも補充しようとJICAの支援事業が始まった。基本的な博物館事業(収集・保存・展示・教育など)、職員の養成、制度の整備がおもな仕事だった。日本側の担当はわたしを含めて三人。ヨルダン側は既存施設であるカラク博物館の二人を除くと全員が博物館の未経験者だった。

彼の地では、博物館は遺跡の出土物を並べておく場所、というのが一般的理解である。展示の説明までは手が回らないところが多い。

観客に向かって積極的に働きかける博物館は全く経験がない。何回かのわたしの一時帰任の期間を利用して、ヨルダンの新人たちに同行してもらい日本での見

ンだが位置の変更ができない。ヨルダンでは、構造物は石で作る。博物館のケースは位置固定、が常識なのだ。

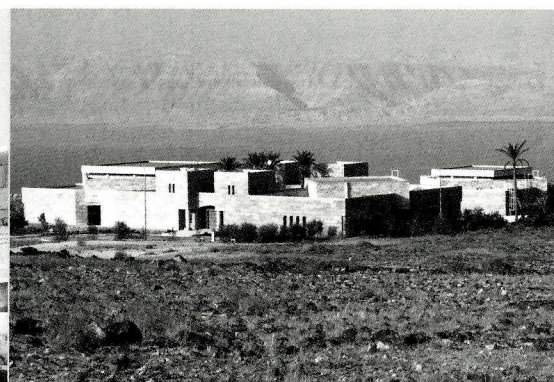
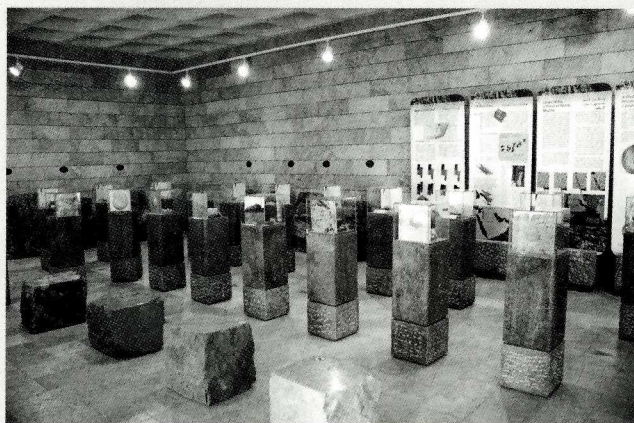
設計図を描いた日本側には、家具としてのケースとベニヤの仮設壁が念頭にあったらしい。双方の思い込みの違いが生んだ結果だった。日本での研修に参加した学芸員たちも可動展示の必要を理解したがすでに遅かった。わたしには国際協力での異文化理解の必要性を再認識するまたとない事件だった。

今、ヨルダンの博物館は世界に目を向けて新しい一歩を踏み始めている。



2007年12月時点で建設中の国立ヨルダン博物館。外装は石で化粧張りするのが公共建造物の常である

死海博物館の内部。石の台座に乗った展示ケースは美しいが移動が難しい



死海展望台の施設。死海博物館はこの建物の一部を占めている。死海の向こうにイスラエルの丘陵が見える